

産業界からの意見

1 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

2020年度から1年生を対象としてプログラムを開始したところである。今後、当該学生が社会に出て、それぞれの組織（企業、自治体、団体等）で数理・データサイエンス・AIを活用することが期待される。

2 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

2022年1月19日に大手情報サービス企業の研究所研究員に対して、本学の取り組みを説明し、以下のような意見を頂いた。

- ・ Excelの演習はとても良いと思った。実社会でもまずExcelを使うし、我々もまずはExcelを使う。統計検定に「データサイエンス基礎」と「データサイエンス発展」というのが最近できたが、そのうちの「データサイエンス基礎」の方は表計算を使った試験になっている。それにも対応できる内容になっていると感じた。
- ・ 我々の部署でも統計検定の取得を奨励している。基礎レベルとして、大卒レベルの「2級」の取得を奨励している。可能ならば「準1級」の取得も奨励しているが、これはかなり難しい。富山国際大学の学生さんは「3級」と「データサイエンス基礎」を取得することで、社会に出てから専門技術者とのコミュニケーションが容易になるはずなので、取得をお勧めしたい。
- ・ 製造業のデータはなかなか手に入らない。富山国際大学で取り組むのであれば、どこかの企業と組むしかないだろう。製造業のデータで重要なのは「外れ値」とか「欠損値」であり、そういうものをどう処理するかというのが重要になる。Kaggleとか、KDDのような学会にあたるしかないかもしれない。しかしそれらに取り組むとなると、教員の負担が大きくなるだろう。
- ・ 公共分野では紙からデータに一元化する動きがあり、データになった後でどのように活用するかを検討がされている。金融分野では与信審査などの分野でデータ活用がされている。当社ではプログラミングしなくてもデータ分析できるツールも使いながらデータサイエンティストを育成しようという動きがある。ビジネスサイドの人間はこうしたツールを使ってデータサイエンスの概念を理解して取り組むということを行っている。

3 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

Excelを使って実データをグラフ化したり、分析したりすることで、学生が興味を持つようにしている。

4 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

現代社会学部の「ビジネス情報演習I」「ビジネス情報演習II」「情報科学概論」、子ども育成学部の「人間と情報」では、ほとんどの授業終了後にアンケートをとり、当該授業が理解できたかどうかを確認し、その結果を次回授業に反映させている。具体的には、理解度が低かった場合、次回授業でよりわかりやすい方法で説明するなどの工夫を行っている。なお、その場合であっても、シラバスに記載した内容を減らしたり、水準を下げたりすることの無いようにしている。